

文化

九〇一生、小説家の今東光太郎（一八九八生）、芸術家の岡本太郎（一九一一生）、考古学者の末永雅雄（一八九七生）や歴史学者の永島福太郎（一九二生）などだ。

▼「わが良友、悪友」

その中でも、特に個性の強い二人がいる。秋篠寺任職の堀内瑞善（一九〇四生のこと）は「少しばかり変わるものだが、頭がよかつた。一言居りで、ずけずけものをいう人だった。（略）衣食に頓着せぬ人であった。私はわりあい親しくしていたが、何度もいつめがと思ったかしれない」。原書

前川佐美雄（一九〇三～九〇）の『大和まほろばの記』には、彼と同年代の多彩な人々が登場する。佐美雄が遺稿集を編集した春日大社の水谷川忠麿（一九〇二生）をはじめ、東大寺の上司海雲（一九〇六年、日本浪漫派の保田與重郎

▼多彩な交遊録

# 新 な ら 民俗通信

18 勺 築子



前川佐美雄『大和まほろばの記』と歌集『大和』『大和六百歌』

多彩な交友、逸話満載

でゲーテを読み、破れ笠に荒同行者の辰巳利文（一八九八生）は明日香出身の歌人。繩の帶をしめていた住職への親しみが感じられる一文だ。もう一人は、傑僧、怪僧と呼ばれた薬師寺長老の橋本凝胤（一八九七生）。その出会いを中心に書かれた最終章「薬師寺」は、他章の倍以上、三十七頁に及ぶ。大正十（一）このとき佐美雄十八歳、利

愛嬌など少しもないのだ。こんな坊主のところに厄介になるのは御免だと思ったが、辰巳君は平気だ。歌の話や佐佐木信綱のことなど話し出し始めた。（略）すると癡鷦は、君は信綱の弟子か、信綱は歌は下手だね、といい出した。あとで辰巳君が信綱の「逝く秋

日記やから、と笑っていたが、死んだらいやおうはない。必ず人に見られるだろう。それを見つめているのか、凝胤をどう思っているのか、凝胤の歌を見たいが、いつのことか。」

## ▼哀歌ではない「大和の記」

「の大和の國の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲」の歌碑を建てたいといったが、凝胤はいやだね、お断りだ、と言つて居もなかつた。（略）話してゐるとわかつて來た。案外に神經質だ、人見知りをする。ついあらぬことをいうが、根はあたたかいよい人のだ」以来、交友は凝胤が「くな」るまで続く。「本心から歌をけなしたのではない。かえって尊敬していたということは、私がいちばんよく知つてゐる」という佐美雄の働きかけもあり、信綱の歌碑は昭和三十（一九五五）年、薬師寺に建てられた。

『大和まほろばの記』表紙  
カバー紹介文の「失われゆくものへの哀歌を奏でる」には異議がある。佐美雄の文章は、大和への哀歌一邊倒ではない。言うべきことはすげえけれど苦言を呈し、こうあってほしいという提案もある。辰巳利文は『大和雑記』で佐美雄について、「君の態度は實に不遜である」と言い、「僕の最も敬愛する君」と書く。その姿は、佐美雄が信愛を込めて描く堀内瑞善師や橋本凝胤師に重なってみえる。

著者たる大和のさまでまな人たちと会話している。陵守りと親しくなつて、お茶を汲んでもらう仲になつたりもする。昭和九（一九三四）年に高円山に行つたときのエピソードがおもしろい。

た。ちがう、高円山だよ。知らんのか、とううぐあいであつた」  
民俗調査で、その地での呼び方を調べるとき、「この花は何と呼びますか」と訊く。具体的な固有名詞を入れて質問すると、正確な聞き取りができないからだが、佐英雄の訊き方は、この応用になつて興味深い。

歩き、見て、聞き、その思いを書き残す民俗学は、過去を振り返るだけの哀歌ではない。『大和まほろばの記』は、多彩な交友だけでなく、そのことも私たちに教えてくれる。

和九（一九三四）年に高田正  
に行つたときのヒヒードが  
おもしろい。

た。ちがう、高円山だよ。知らんのか、とううぐあいであつた」  
民俗調査で、その地での呼び方を調べるとき、「この花は何と呼びますか」と訊く。具体的な固有名詞を入れて質問すると、正確な聞き取りができないからだが、佐英雄の訊き方は、この応用になつて興味深い。  
歩き、見て、聞き、その思いを書き残す民俗学は、過去を振り返るだけの哀歌ではない。『大和まほろばの記』は、多彩な交友だけでなく、そのことも私たちに教えてくれる。

「いの村く来て、いちばんの三首は作る。それが五十年ほどつづいているという。すぐなく見積つても三万五千首はあるわけだ。(略)わしのは日記やから、と笑つて、いたが、死んだらいやおうはない。必ず人に見られるだろう。それどう思つて、いるのか、凝胤の歌を見たいが、いつのことか。」

凝胤とのエピソードは、『大基芳影凝胤長老物語』に収録された「わが良友、悪因の名が復活したのはそれか。

ぼりやすい道を訊いた。するとその人は、高田山。そんな山知らんといつのだ。この山だよといふと、これは裏山や、東山ともいふと答えた。そこでまた訊いてみた。三度ばかり訊いてみたが答えは同じだった。あとで江戸時代の地図をしらべて見た。やはり高田の名はなく、白毫寺山と記したのがあつた。(略)高田の名が復活したのはそれか。

(しゃく・ね) 歌人 奈  
良民俗文化研究所事務局長  
=この項おわり、次回は5  
月6日付

た。ちがう、高円山だよ。知らんのか、とううぐあいであつた」  
民俗調査で、その地での呼び方を調べるとき、「この花は何と呼びますか」と訊く。具体的な固有名詞を入れて質問すると、正確な聞き取りができないからだが、佐英雄の訊き方は、この応用になつて興味深い。  
歩き、見て、聞き、その思いを書き残す民俗学は、過去を振り返るだけの哀歌ではない。『大和まほろばの記』は、多彩な交友だけでなく、そのことも私たちに教えてくれる。